
茗荷

花村かおり

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茗荷

【Nコード】

N7111Y

【作者名】

花村かおり

【あらすじ】

本当の恋をしたことがない25歳の女性が、大人の恋に飛び込んでいく

茗荷 1

その日は秋の長雨が終わり、天気の良い日だった。直子が勤める会計事務所は少し古いビルにあり、エアコン配備されているものの、ビルの設計が悪いのか、室内は少し汗ばむくらいであったが、直子は淡々と仕事を進めていた。

公認会計士の先生が1名、従業員4名、パートさんが3名の小さな事務所ではあるが、それぞれが担当毎に仕事を上手く回し、また人間関係もとても良かったこともあり、直子にとっては居心地の良い職場だった。直子は大学で会計を学び、公認会計士の第1段階となる試験は合格しており、この事務所で実務を経験しながら、残りの試験に合格して、ゆくゆくは公認会計士になり、独立などを考えていたが、居心地の良さに、ずっとこのまま補助者でも良いと思ってしまう。

年度末調整の時期は、ものすごく忙しくなるが、それ以外は残業も少なく、自分の時間もとれた。その日も定時を少し過ぎると、次々と社員が「おつかれさまです」と声をかけて帰っていった。直子もそれに違わず、挨拶をして事務所を出た。

事務所は直子の自宅から1駅ほど場所にある。晴れた日は1駅、30分ほど歩いて帰ることが多かった。その日も天気の下さにつられて、30分歩いて家路についた。

直子の自宅は閑静な住宅街であったが、その中にぽつんと理容店と日本料理屋が2店並んで、商売を営んでいる。直子の家はその「ぽつん」の1つの理容店であった。日本料理屋は1つ小さな道を挟んで向かい側にあった。

家に帰ると両親が数名のお客の対応をしていた。お店は8時まで営業していたから、夕飯は直子ができることが多かった。

昼間に母親が買ってきた食材を利用して、簡単なおかずを作って、食卓に並べるとその日の仕事が終わったような気がした。本来なら

ば、両親の仕事が終わるのを待つて、一緒に食事をするのだが、その日はその気になれず、一人先に夕飯を済ませ、自分の部屋に戻った。

直子にはつい最近まで恋人がいた。大学時代の一期先輩で、テニスサークルで知り合った。大学時代から付き合っていたのではない。卒業してから、OB会で再開し、自然の流れで付き合うようになった。特にお互い猛烈に好きだったという訳でもなかった。でも、お互い気が合う相手だったし、付き合っている間は楽しかった。しかし、別れる数ヶ月前から詳しいことは良く分からないが、会社の経営が危うくなり、彼も仕事に付きつ切りになっていた。一週間に一度ぐらいは時間を作つて、会うようにしていたが、それもまもなくなくなった。直子が心配してメールをしても、返信はほとんどなくなった。今年の夏の終わりに「私のこと忘れちゃったのかな？会いたくないのかな？」というようなメールを送った。それから、何度メールを送つても、返信が来なくなった。病気でもしていないかと心配になって、昨夜、携帯に電話を試みたら、着信拒否となっていた。そのとき、捨てられたのだと認識した。こんなこと生まれて初めてだった。

なんで捨てられたのか分からない。でも、受け止めるしかないのだ。よくよく考えてみれば、彼の外見も性格も好きではなかったような気がする。彼のことを本当に愛していなかったのだと思った。悲しくもなんともなかった。ただ、彼が不誠実であることに失望した。こんな風に簡単に捨てられてしまう自分が惨めになった。

「まあ、こんなこともある。考えても仕方ない」と声を出していった。

すると母親が私の部屋に入ってきた。

「直ちゃん、もう寝ちゃったの？」

「寝る訳ないじゃない、まだ8時前だよ」

「だつてご飯先に食べちゃったみたいだから」

「ああ…、ちよつと、勉強しようと思つて」

その割には参考書もノートも広げていないのを母親は気づいてか、
「あら、そうなの。勉強中悪いけど、寿屋さんに茗荷、分けてもら
つてきてほしいの。お父さんがどうしても冷奴の薬味に食べたいん
だって」と言った。

「うーん。わかったよ」と私はしぶしぶ椅子から立ち上って寿屋に
向かった。寿屋は向かいの日本料理屋さんのことである。寿屋の裏
庭では、この時期になると茗荷が自然に生えてくるのである。

私は道を横断して寿屋の勝手口に向かった。

茗荷 2

とんとんとドアをたたいて「すみません」と声をかけると「あいよ」と威勢の良い女将さんの声が聞こえてきた。

寿屋は料亭のような品の高級料理をメインに固定客を抱えていて、景気も良いみたいだった。中からはお客さんの笑い声が聞こえていた。

「あら、直子ちゃん、今日はどうしたの。」

「すみません、父が寿屋さんの茗荷がほしいうもので、分けてもらえませんか？」

「いいわよ、芳夫さんは茗荷が好きだものね。ねえ、誠二さん、庭から茗荷とってきてあげてよ。」と女将さんは言った。

誠二さんはこの料理屋の板前さんである。板前らしく、白い帽子と衣装を身につけていた。髪の毛も短く、皆が抱く板前さんの典型のような清潔さを持っていた。

「ええ、いいですよ」と言っているので、

「私も一緒に取りに行きます」と誠二さんについて行った。

当初はその前は女将さんと旦那さんの二人で切り盛りしていたが、誠二さんは直子が高校生のころ、この店にやってきた。神楽坂の有名な料亭で働いていたのをやめて、この料理店に勤めるようになったと聞いていた。誠二さんが勤めるようになってから、料理店は繁盛するようになったように思える。年に何回か家族で食事に行くことがあるが、誠二さんが作った料理は全て、美味しかった。女将さんも旦那さんも誠二さんのことを一目おいているようであった。

裏庭で誠二さんは茗荷を見繕って、4束摘み取って直子に見せた。

「お父さんはこれで満足かな」

「ええ、こんなにいただければ大満足です。ありがとうございます」と答えた。

誠二さんには妙な色気がある、飾らない板前さんの格好で、年も4

0は過ぎているだろうに、一言、一言に色気を感じた。

「ここの茗荷は毎年生える場所が変わるんだぜ、去年はあっち、今年はここに生えている。まるで意思をもっているようだね」

「そうなんですか？」

「そう、不思議だろ」

「不思議ですね」

「そついやさあ…」

「直ちゃん、いくつになったんだい」

「今年で25になりますよ」

「そうかあ、どうりで綺麗になるはずだ」

直子は誠二さんにそんなことを言われて、心臓がドンツとなって何も言えなかった。誠二さんは、そんな直子をじっと見つめている。

しばらく経って、「お世辞ありがとうございます。」と私は言った。

「いや、お世辞じゃないよ。それに直ちゃんは頑張りやだからね、公認会計士になりたいんだろ。おれそれ聞いたとき驚いたよ。」

「でも、なりたいただけで、なれるかどうかは難しいんです。」

「いや、直ちゃんだったら、できそうだよ。意思が強そうなあ。」

「いえ、でも難しいですよ。」

「あはは、とにかく頑張つてよ。」と言って、はい、と言って、家に戻った。

心臓がまだときどきしていた。誠二さんと話すといつも、そうだ。でも誠二さんにとっては私なんて小娘で相手になんてしてくれないだろうと直子は思っていた。それに誠二さんには恋人がいるようで、時々店にも顔をだしていた。清潔そうな誠二さんと対照的に、派手な水商売系の匂いのする女の人だった。

家に帰ると「お母さん、もらってきたよ」と台所にぼんと茗荷を置いて、自分の部屋に戻った。心臓のときどきはしばらく収まらなかった。

茗荷3

その日、直子は午後に休暇をもらって、午前中の業務を終わらせて、あわてて事務所をでた。離れて暮している5歳年上の兄から連絡があり、会いたいと言われたからだ。

寿屋の前を通ると誠二さんが女の人と談笑をしていた。直子は軽く会釈をして通り過ぎようとすると、

「直ちゃん、お帰り、今日は早いんだね」と誠二さんが声をかけてきた。

「ええ、今日は兄と約束をしているので、無理を言って、休みをもらったんです」

「へえ、隆と会うのか、元気しているかな？よろしく言っておいて」と誠二さんは言った。

「はい、伝えておきます」と言うと、誠二さんが女の人と一緒にいったから、なんとなく会話をするのがはばかられたため、では、言っ

て急いで家に向かった。

家に着くと否や、母が、

「直ちゃん、今日は早いじゃない、どうしたの？」

「ちよつと、友達と会う約束をしていてね、午後お休みをもらったの」

「へえ、いいわねえ」と母は言うと、仕事に戻っていった。

両親に兄の隆と会うことは伝えられなかった。

兄は5年前に家を出ていた。兄には近所に幼馴染の婚約者が居た。しかし、結婚式をどうするか決める段階になって、突然、婚約者と別れてしまったのだった。

それと同時に兄は家を出た。母は

「何も家を出なくてもいいじゃない」と言った。兄はそのころ、実家の理容店で理容師として働いていたからだ。

「美希に申し訳ない。俺にはもう会いたくないだろうしさ」と言っ

て、さつさと別の理容店に就職を決め、家を出て行った。それから
は年に1度ぐらいしか実家には戻ってこない。
兄は直子だけに道ならぬ恋をしたと告白をした。好きになってはい
けない既婚者の女性を好きになってしまったということだった。相
手も自分のことを好きでいてくれる。こんな気持ちになったのは初
めてなんだよ、と言った。

茗荷 4

直子は着替えてから、急いで家をでた。誠二さんはまだ通りに居て店の周りをほうきで丹念に掃いていた。もう女の人は居なくなっていた。

「今日はお店お休みなはずなのに、どうしたんですか？」と私は尋ねてみた。

「今日はね、旦那さんと女将さんが法事でいないんだよ。だけど、明日、大事なお客様が来るんでね、仕込みをしに来ていたんだ」と誠二さんは答えた。

「隆さんに会うんだろ、彼女と上手くやっていけているのかね」

兄は誠二さんを兄のように慕っていたから、女性関係のことも相談していたようだ。

「私も最近のことは良くわからないんです。だから、今日聞いてみようと思って」

「そうだな…。たまには俺のところにも顔を出せと伝えておいてくれよな」

「ええ、もちろん」

そう答えて、兄が待つ場所に向かった。

兄は駅前の古びた喫茶店で待っていた。

「直子、久しぶり、元気になっていたか？」

「お兄ちゃん、元気になっていたけど、突然どうしたの？心配したよ。しかも、家には帰らないで、別の場所で話そうなんて」

「いやさ、家にかえると母さんが戻って、理容店を継いって、うるさいだろ、だからさ」

「まあ、そうだけど」

「美希は元気になっているかい？」と兄はかつての婚約者のことを聞いた。

「美希さんは…、昨年、近所のおばさんのつてでお見合いをして、

結婚したわ」となんとなく伝えづらいことだったが、正直に言った。

「そうか、美希は幸せになったんだな」

「ええ、来年には赤ちゃんも生まれるんだって」

「そうか」と兄は言うのとタバコを一服した。

「ああ、それと寿屋の誠二さん、たまには俺のところにも顔を出せ
って言っていたよ」

「誠二さんかあ、懐かしいなあ、元気かい」

「うん、元気そうにしているよ」

「そうかあ」と言うとううつとため息をついた。

「ねえ、お兄ちゃんは女の人と上手くやっているの？前、話してく
れた」

「そうねえ、上手くは行っていないよ」

「なんで」

「相手は所帯持ちで離婚はできないって最近になって言い始めたん
だ」

「でも、最初は離婚してお兄ちゃんと一緒にいたいって言ってい
たらしいじゃない」

「そうだったなあ、でも婚姻関係を解消するのは難しいらしいんだ。
相手がうんと言わないし、慰謝料とも請求されているんだ」

「じゃあ、慰謝料を払えばいいんじゃない」

「まあ、そうだな。でも、ホントは旦那との安定した生活を壊し
たくないんじゃないか？」

「でも、したら、お兄ちゃんと続けるのもおかしいじゃない」

「確かにそうだ、でも、もう離れられなくなってしまったね」

直子は少し黙った。直子は兄のように恋に燃え上がったことがない
から、実感がわからない。

「直子…、直子はどうすべきだと思うかい？」と尋ねてきた。

「私は、そんな人と別れて、また新しく生活を始めるべきだと思う
わ。もう美希さんも幸せになったんだもの。うちに戻って、働いて
もいいじゃない」

「そういう考えもあるかねえ。近所では俺は悪者だぜ、結婚間近で女を捨てたひどい男」と兄は遠くを見ながら言っていた。

「そんなの、昔の話よ」

「いや、そういう噂はなかなか消えないんだ。女も寄つてこない」女が寄つてこなくてもいいじゃない…と言い掛けたが辞めた。

「いやさ、今日は、直子に話を聞いてもらいたかったんだ。仕事お休みさせて、ごめんな」

「いいよ、今は忙しい時期じゃないんだし」

兄はこれからどうするつもりだろう。少し心配になった。

私も彼に振られたんだよ、とかそういうことも話したかったけど、話す気になれなかった。直子の失恋と兄の恋愛とは重みが雲泥の差で違いすぎるのだ。

話が済んだのか、兄はお会計をしようと行って、店をでた。

「今日は、ありがとう。また、電話するよ、誠二さんによく伝えておいてくれ」と言って駅に向かっていった。

茗荷 5

それから数日たったことであつた。直子はいつものように寿屋の前を通つて、家に帰るところで誠二さんに会つた。

「直ちゃん、お帰り」

「ただいま」

いつものように答えていた。

「昨日、隆から電話が来たよ」

「何か言っていましたか」

「俺に相談したいことがあるっていうんだよ。直ちゃんには、もう話しているかもしれないけど、それで、今夜俺のアパートにくるつて言つんだ。直ちゃんも一緒にどうかね？」

「ええ…、いいですけど。私も兄のことは心配しているんです。どういふつもりなのか」

「じゃあ、決まりだ。今日は予約が入っているお客さんが7時までだから、8時にはアパートにつけると思うから、隆と一緒においで」

「ええ、じゃあ、悪いけどお邪魔しますね」

直子は誠二さんのアパートに言ったことはないけど、近所だから住んでいる場所は知っていた。いい年をした腕のいい板前が住むような家ではなかったが、男一人だから十分なのか、その小さなアパートだった。

家に帰ると兄に携帯電話に電話をした。

「直子だけど、お兄ちゃん、今、電話大丈夫？」

（ああ、大丈夫だよ。）

「誠二さんに聞いたんだけど、今日、誠二さんのアパートに行くつて聞いたけど、直ちゃんも一緒にどうかって」

（そう、誠二さんがそういうなら。誠二さんは直子のこと気に入っているからなあ、昨日も直ちゃん、いい女になったなんて、言っていたんだぜ。男二人だと暑苦しいと思つたんだらうよ。本当は男二

人で相談したいこともあったんだけどもさ。まあ、いいさ、直子だったらいいよ、一緒に行こう。」

「じゃあさ、誠二さんのアパートの前に8時半ぐらいに待ち合わせしようよ」

（分かった、じゃあ8時半に）

いつもように両親の料理は用意をしたが、自分は食べず、自分の部屋に向かった。あっと思い出して、台所に戻り、かぼちゃの煮つけをタッパにつめた。誠二さんの部屋で食べようと思ったからだ。

自分の部屋で着るものをしばらく思索したが、先週買った可愛いリボンがついたピンクのカットソーとジーンズを身につけた。デートでもあるまいし、近所の小さなアパートに行くだけなのだから、あまりおめかししても不自然だろうし、なんとなく中途半端な格好になっちゃった。でもまあいいやと思った。

「ちよつと、友達と飲みに行ってくる。少し遅くなるかもしれない」と母に告げて、家を出た。

8時25分ぐらいに誠二さんのアパートの前に着いた。30分を過ぎてても兄は現れなかったので、携帯に電話をした。

「お兄ちゃん、もう、着いてるよ」

（そうか、ごめんな、仕事が押しちゃってさ、20分ぐらい遅れるから、先に行っていてもらえるかな。）

「いいけど、できるだけ早く来てよね」

（分かっているよ。誠二さんだつて男だからな、大事な妹に手を出されても困るからな。じゃあな）と兄は、電話越しで笑って言うてから、電話を切るうとした。

「あ、まって、誠二さんのアパートの部屋番号いくつ？」

（あ、ああ、2回の1号室だよ。悪いけどよろしくな）といって今度こそ切った。急いでいたのだろう。

直子はアパートの2階の1号室の前でインターホンを押した。

誠二さんは上下スウェット姿で玄関のドアを開けた。

「直ちゃん、いらっしやい、待っていたよ」

「あの、兄が少し遅れそうって連絡があつたので、先に来ました」
「あいつ、人を誘っておいてなんだよなあ。まあ、いいや、入って入って」

誠二さんの部屋は男の人の部屋というのに綺麗に整頓されていた。整頓というより、物が無いといったほうが良いだろう。

「まあ、座つてよ」と言うと、誠二さんは台所に向かった。
なんとなく誠二さんの後を着いていった。

「何かお料理しているんですか？」

「何もつまみもないとね、寂しいだろうから」

台所は職業柄か、様々な調味料や調理器具が並べられていた。

「あ、勝手に入つてごめんなさい」と無意識とはいえ、人の家を勝手にうろついてしまったことを謝った。

「いや、何も隠すものはないから、いいよ」と誠二さんは言った。

誠二さんはイカとサトイモの煮付けと、大根とゆずの酢の物、茗荷とわかめの和え物を作っていた。

「あの、私もかぼちゃの煮つけ作ってきたんです」と直子はタッパを誠二さんに渡した。

「直ちゃんはいつも夕食を作っているんだってね。お母さんから孝行娘だつて聞いていたよ。ありがとう」と誠二さんは言いながら、品の良い器にかぼちゃの煮つけを移していた。

これらの料理を全て、部屋の小さなテーブルに並べると誠二さんはビールでも飲むかと言って、冷蔵庫からビール瓶を出し、二つのコップになみなみと美味しそうな泡がのつたビールを注いだ。

茗荷6

誠二さんは直子の作ったカボチャの煮物を口に入れた。

「ああ、上手い。直ちゃんは頭が良い上に、料理もうまいんだね」

「なんか、プロに言われると恥ずかしいです」

直子も誠二さんの用意した料理を食べた。

「美味しい」

「そりゃ、それで商売してるからね」

「このわかめと茗荷の合えもの。茗荷の味が引き立っていて、すごく美味しいです」

「これは店の裏庭に生えていたものを、分けてもらったんだ」

「ええ、この前、私がいただいた」

「茗荷つくせがあるだろ、味も草みたいじゃないか。でも、そのくせがたまらないんだよ」

誠二さんはビールをぐいっと飲んだ。

「ああ、ビールもとびきり上手く感じるな」と言った。

「そういえば、直ちゃんは恋人と上手く行っているのかな。たまに車で送り迎えしていた」

「あの、彼とは別れたんです。というか連絡が取れなくなってしまつて、自然消滅みたいなものです」

「そうなのか…」

「理由も良く分からないんです。でも、そうなつてから思つたんですけど、別に彼のこと、本当は好きじゃなかったんじゃないかって。だから、悲しい気持ちにもならないんです」

「そうか、直ちゃんは強いから、この茗荷のように、生える場所を変えて、毎年、上手く生きていけるんだ。…それにしても、直ちゃんのような良い女と別れるとはね、その彼氏も馬鹿なことをしたもんだ。こんなに綺麗なのに」

「また、お世辞を」

「お世辞なんかじゃないよ。俺が初めて、寿屋で働くようになったときは、まだ高校生で若いなあって思ったけど、いつの間にか、大人の良い女になったように思えるよ」

誠二さんがそういうとインターフォンが鳴った。

「隆かな」と誠二さんが玄関に向かった。

「ごめん、遅れて」と言わずかずかと部屋に入ってきた。兄は誠二さんを兄のように慕っていたから、このアパートにも何度も着ているのだろう。

「隆、お前、久しぶりだな。久しぶりなのに遅刻とはな。俺らはもう一杯やってるぞ」

「いいなあ。仕事が押しちゃって、すみません」と兄は茶目つ気のある笑顔で誠二さんに答えていた。

「それで、なんだよ、話って」と誠二さんは兄が席に着く前に尋ねた。

「まあ、その前にこっちも一杯やらせてくださいよ」と言って、すわり、ビールをぐびつと喉を鳴らせて飲んだ。

「ああ、仕事の後のビールは美味しいですね」と言った。

「まあ、急ぐことないか」。カボチャの煮つけは直ちゃんが作ったもの、残りは俺が作った。食べてみる」

兄は三種類の料理を口にした。

「ああ、うまいなあ。直子の料理は久しぶりだけど味付けは変わらないね。誠二さんはさすがプロって感じだ」とうれしそうな顔をしてパクパク食べていた。

誠二さんはビールを飲みながら、その様子を微笑みながら見ていた。一通り食べ終わったあと、兄は切り出した。

「俺、もう、駄目かと思っているんですよ。直子にも先日駄目だしされたんです」

「何を？」

「俺、人妻と付き合っているじゃないですか。考えれば、もう5年にもなります。そのころ付き合っていた婚約者を捨てて、彼女にほ

れ込んだ。相手もそうだったと思っています」

「ああ、そうだったな」

「相手も、離婚をして俺と一緒にになると、約束をしました。でも、約束はしたものの、離婚への進展が一向にないんです」

「そうか、俺は結婚も離婚もしたことがないからな、わからないけど、離婚は相当なパワーが必要だというぞ」

「相手がどうしても承諾しない…、だから、約束を守れないかもしれないって言い出したんです」

「そうか。それで、お前はどう思ったんだ」

「それでも、惚れた女だったから離れたくないと思っています。でも、このまえ、直子にそれを話したんです。そしたら、そんなの辞めろって。そりゃ、思いますよね」

「うーん…」

誠二さんは黙ってしまった。

「俺はさ、昔、神楽坂の料亭で働いていたんだ。そのときも腕の立つ板前として重宝されていたんだけど、なぜ、小さな日本料理屋にやってきたか、知っているかい？」

「いえ、」

直子も兄もごくりと喉を鳴らした。腕の立つ誠二さんが何故、このような小さな店で働いているかは、皆の謎だったからだ。

茗荷 7

「俺はね、16のころから別の日本料理屋で板前修業をしていて、26歳になったころ、親方の紹介もあって、神楽坂の有名な料亭を紹介されて働くようになったんだ。ちようと直ちゃんと同じぐらいの年齢だった」

16歳というと中学をでてすぐ、板前修業をする。直子には想像のつかないことであった。

「神楽坂の料亭でも重宝がられてね、一年も経たずに、一通りのことは任されるようになったんだ。そしてね、少し自分に自信が出てきたというか、余裕が出てきたというか、ある女に惚れちまったんだ。俺はそれまで料理一筋で生きてきたものだから、心底女に惚れるってことがなかったから、あつという間にはまってしまったんだ。でも相手が悪かった」

「そうなんですか」

「相手は、その料亭の女将で年も30歳そこそことても綺麗な人だった。まあ、雇われ女将さ。でも経営をしていたのは企業のお偉いさんで、その愛人でもあったのだ。でも愛人という境遇が彼女も寂しかったんだろう、俺が思いを伝えると、すぐに恋人のような関係になった。俺は女将が愛人としてこの店で働いていることも知っていたけど、仕方がないことだと思って、5年ぐらい働いた。もちろん、周りには気づかれないうにこっそりね。料亭はその間に評判があがり、お客もどんどん増えていった」

直子も兄も誠二さんの言葉の一言、一言に聞き入っていた。

「でも5年経ったある日、女将に店を辞めてほしいと突然言われたんだ。愛人に関係がばれてしまった、このままでは、私は店を辞めなければならぬ。でもここまで育てた私の料亭を手放したくない、辞めたくない。だから、別れてほしいってね。俺は彼女の気持ち痛みいほど分かった。その料亭をやめ、紹介された寿屋へ一ヶ月も経

たないうちに、移ったんだ。彼女との関係もきっぱりあきらめてね」

「そんなことがあったんですか」

「そのときは、不幸のどん底に居たような気がしたよ。でもこの町の人たちは優しいし、寿屋の旦那さんも女将さんもここにやってきた事情は何にも聞かなかった。小さい店だからお客さんの反応も厨房に立っているだけで分かったから、やりがいを感じて一生懸命働いた」

「ええ」と直子はうなづいた。だから寿屋は今も繁盛しているのだろうと思った。

「でも、彼女への思いは5年経っても、10年経っても薄れないんだ。あのときの気持ちが一人でアパートでビールを飲んでいるとふと面影を思い出してしまう」

「あの…、時々、誠二さんに会いに来る女性は、恋人なんですか？」と私は聞いてみた。

「恋人といったら、そんなものかな、でも強い恋愛感情は彼女には沸かないんだ」

誠二さんは遠い目をして言った。

「しかしね、先月の末にその惚れた女から、店に突然電話があったんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7111y/>

茗荷

2011年11月26日20時58分発行